

最澄における『仁王経』受容の意義——不空教学と大乘菩薩戒構想との関係を視野に——

富 樫 進

はじめに

弘仁十一年(八二〇)二月、最澄が奏上した『顕戒論』には、八世紀後半に中国への密教定着に大きな役割を果たした天竺僧・不空関連の諸言説が、円照撰『代宗朝贈司空大弁正広智三藏和上表制集』(『表制集』)より引用される。また、『顕戒論』と同時に提出された『内証仏法相承血脉譜』(『血脉譜』)所収「胎藏金剛両曼荼羅相承師師血脉譜一首」では、『表制集』巻六「三藏和上当院碑」(『当院碑』)に依拠した「金剛界毘盧遮那如来↓金剛薩埵↓龍猛↓龍智↓金剛智↓不空↓順晁↓最澄」という相承系図が示される。

『表制集』の初将来者は、最澄と同時に渡唐し長安にて不空の高弟・恵果に師事した空海であり、彼が朝廷に提出した『上新请来経等目錄表(御请来目錄)』には「大唐大興善寺大弁正大広智三藏表答碑六卷」の記載が見える。^③『顕戒論』『血脉譜』成立の二年後に当たる弘仁十三年(八三三)、空海は平城上皇・高岳親王対象の灌頂儀札執行に際して作成した『大和尚奉為平安城太上天皇灌頂文』(『太上天皇灌頂文』)に「当院碑」をふまえた「大日如来↓金剛薩埵↓龍猛↓龍智↓金剛智↓不空↓恵果↓空海」という相承を掲出する。^④ここに、唐王朝の玄宗・肃宗・代宗三代の灌頂阿闍梨を務めた法祖不空、同じく徳宗の授戒師・授灌頂師を務めた師僧恵果の後継者の地位に自らを位置づ

け、平城・高岳父子を対象とする灌頂阿闍梨としての正統性ならびに正当性を顕示せんとする空海の狙いを求めるならば、最澄による『表制集』からの引用にも空海と同様の目的を見出すべきであろう。

延暦二四年（八〇五）、最澄は空海に先駆けて、桓武天皇の名代たる勤操・修円を対象とした灌頂を執行した。最澄が自身の著作で不空の功績を引き合いに出したことは、日本初の天皇を対象とした灌頂儀礼の再評価を促す目的があったと考えられる。また、大乘菩薩僧の活動拠点となる一向大乘寺の先例を主張する際、天竺出身の不空提案・大唐聖帝の代宗勅答になる「永式」を論拠とするなど、最澄が『表制集』所収の諸言説を天竺・大唐という二重の〈仏教的権威〉の象徴として認識し、「先帝」桓武の遺詔とともども大乘菩薩戒授受の正統／正当化に欠くべからざる要素と見なしていたことは明らかだ。

最澄が中国で天竺僧・善無畏門下の順暁から受けた灌頂の実態を示唆する記録として、『顕戒論縁起』所収「大唐秦嶽靈巖寺順暁阿闍梨付法文」(以下「付法文」)内の「三部三昧耶」が挙げられる。これは胎藏界と金剛界の両部とが予め合糅された、中国国内で捏造された儀軌に基づく真言と推測され、金剛界・胎藏(界)の併修による、空海の金胎両部密教とは本質的に似て非なる内容と考えられる。さら

に「付法文」には善無畏を法祖とする「善無畏↓義林↓順暁↓最澄」という相承系図しか示されていないにも関わらず、やはり『顕戒論縁起』に収められた内侍宣および公驗では「方今最澄闍梨、涉溟波受不空之胎訓」「遇天竺不空、三藏第三弟子鎮国道場内供奉順暁和尚、入灌頂壇、受三部悉地法」(傍点はいずれも論者)と『血脈譜』同様順暁を不空門下と規定する点で、順暁から直接授与されたはずの「付法門」本文とは異なる内容となっている。

最澄は灌頂受法・帰国直後の段階で胎藏・金剛の区別を知らず、空海との交渉を通じて両部の知識を獲得したことで、自らの灌頂儀軌を「授両部灌頂」「胎藏金剛両曼荼羅相承師師血脈」(傍点はいずれも論者)と規定するに至ったようだ。これは、冒頭で示した『顕戒論』『血脈譜』における不空関連の諸言説への注目、及び「当院碑」に基づく相承系譜の作成と同じ目的意識に基づく行為といえる。

弘仁二年（八一〇）の乙訓寺別当への補任や同七年の高野山下賜、同年の嵯峨天皇の病氣平癒を目的とした加持祈禱の実施などを通じて正統派密教僧としての地位を徐々に固めつつあった空海の活躍を目の当たりにした最澄は、空海から獲得した新知見や『表制集』所収の不空関係の諸言説を積極的に援用することで、自身の密教教義を「正統」化するとともに、天竺・大唐という二つの仏教的権威を背

景として大乘菩薩戒の「正当」性を主張しようとしたものと考えられる。

ここで問題となるのは、最澄による自宗の正統／正当化を（南都との対抗上必要となる）朝廷との関係構築のみを志向する世俗的次元での行為と見なすべきか、あるいはその生涯を一貫する護国思想をも志向する思想的次元での行為として積極的に評価すべきかという点だ。

不空教学が最澄及びその門下に対して与えた影響については、木内堯央・竹田暢典両氏が具体的にわたちちで言及している。¹⁹しかし、両氏においてはあくまで『表制集』所取の上表文や相承系図がいかなるかたちで最澄の著作に引用されているかという点に問題が絞られており、不空に関する諸言説が最澄の大乘菩薩戒思想の構築に与えた影響および思想的連関の有無という面において、必ずしも十分な論証・検討がなされているとは言い難い。

そこで、小稿では不空訳『仏説般若波羅蜜多經』（以下、新訳『仁王經』）、その訳出時に重要な役割を果たした良賁の手に成る新訳『仁王經』の註釈書『仁王護国般若波羅蜜多經疏』（以下『良賁疏』）の二点を最澄がいかに受容・活用したかを確認することで、最澄における不空の影響が世俗的・表層的なものではなく、生涯の目標であった大乘菩薩戒構想への一貫性をもっていたことを示し、その積極的評

価の可能性を明らかにしたい。

『仁王經』は釈迦が舍衛国の波斯匿王をはじめ十六大王に對し、般若波羅蜜の受持による理想的治世の実現を説く内容の般若部經典で、やはり「顯教」經典である『金光明經』『法華經』とともに護国三部經と称される。永泰元年（七六五）不空は鳩摩羅什訳と伝える『仏説仁王般若波羅蜜經』（以下、旧訳『仁王經』）に代わる新訳として『仁王經』を「訳出」した。²¹不空による『仁王經』再訳は困難に乗じて自らの勢力伸長を企図した不空教団と、外廷勢力に對抗して政治への介入を強めようとする宦官・禁軍との利害が一致したことにより、代宗・徳宗期における護国仏教の方向性が明確化する象徴的なことであったとされる。新訳『仁王經』もまた『良賁疏』とともに、空海によって日本へ請来された。²²

ここで特記すべきは、顯教經典『仁王經』の不空教学における重要性である。不空は単に『仁王經』を改訳したのみならず、中国各地における『仁王經』の長講・講説を、宮中や主要寺院における密教修法とともに護国活動の「二本柱」に位置づけた。²⁴これに関して、空海が葉子の乱発覚直後の弘仁元年（八一〇）、密教經典『守護国界經』『仏母明王經』とともに『仁王經』を「仏為國王」特説「此經」推「滅七難」調「和四時」、護「国護」家安「已安」他。此道

秘妙典也。」として、『仁王経』を用いた護国法会開催を申し出た事実は注目される。不空門下の護国密教の将来者である空海によって示された『仁王経』評価が、最澄の『仁王経』受容に一定度の影響を与えた可能性を考えることもできよう。²⁵⁾

後に述べるように、最澄は弘仁年間以降に新訳『仁王経』および『良賁疏』を積極的に受容・活用していく。七世紀後半より日本仏教史上に出現する非密教経典『仁王経』に即して最澄の〈不空教学〉受容の特質を考えていくことは、奈良期以来の僧綱主導による護国仏教と大乘菩薩戒との連続面・断絶面の双方を浮かび上がらせることにもつながろう。

一、若年期最澄の『仁王経』受容
——新訳『仁王経』との出会いに至るまで

日本では斉明朝六年（六六〇）五月、『仁王経』（以下、新旧の別に触れない場合にこの呼称を使用）「護国品」の内容をふまえた法会が行われるが、これは新羅由来の仁王会の影響を受けたものと考えられている。²⁶⁾ 奈良時代になると『仁王経』は『金光明最勝王経』に次いで重視される護国経典となり、さらに平安期には大嘗祭に対応する一世一代仁王会（二代一講仁王会・踐祚仁王会とも）をはじめ、主催者や目的を

異にする様々な仁王会が施行されるようになっていく。諸仁王会の派生時期・過程については諸説あるものの、一世一代仁王会の定例化を九世紀前半頃と考える見方が大勢と考えられること、²⁸⁾ 日本に影響を与えた新羅の『仁王経』供養が既発の、あるいは予言された災異の鎮圧を目的とする臨時仁王会と位置づけられることから、最澄在世時の『仁王経』供養は基本的に災異発生の（予言が発せられた）段階で臨時に修されるものだったと見なし得る。

最澄は延暦四年（七八五）四月の具足戒受戒直後、七月中旬に突如として比叡山へ籠山した。その間接的理由として、長岡京遷都事業に起因する政情不安や民衆の怨嗟の高まり、蝦夷の叛乱による出羽・陸奥両国の治安悪化や最澄自身の所属していた近江国分寺の焼失などが指摘されている。²⁹⁾ のちに提唱される大乘菩薩僧育成の主目的が国土からの災異の除去にあったことを併せ考える時、当代を釈迦入滅と弥勒降臨との狭間にあたる苦・三災・五濁に塗れた末世と見做す、『願文』に示された極めて厳しい現状認識は、最澄の生涯を一貫する護国思想の源流として見逃せない。ここで、最澄が籠山直後から恐らくはその生涯を通じて、『仁王経』を含む護国経典の読誦を積極的に実践していたという証言の存在する事実は重要だ。ここでは、最澄の高弟・円澄の撰述と考えられる『比叡山建立縁起』(A)、

仁和二年（八八六）延暦寺西塔の院主となった延最が光孝天皇御願の『大般若経』転読に要する僧侶の得度および衣類の賜与を願い出た上表文(B)を提示する。

去延暦四年七月中旬、登_三陟_三叡_三峯、結_三草_三為_三菴_三。奉_一①為_三四恩、毎日転_三読_三法華・金光明・仁王般若等経、一心精勤_三。……(A)〔比叡山建立縁起〕

院主伝灯大法師位延最奏言。故先師贈法印大和尚位最澄、創_三建_三此_三寺、鎮_三護_三國家。造_三藥_三師_三佛像、安_三置_三東塔院、造_三積_三迦_三佛像、安_三置_三西塔院。並充_三住_三持_三之主、仰為_三伝_三法_三之本。毎日長講法華・仁王・金光明等経、奉_三誓_三國_三主、廻_三向_三率_三土。次師座主伝灯大法師位円澄、受_三先師之付属、掌_三西塔之仏事。……(B)〔日本三代実録・卷四十九・仁和二年七月五日条〕

(A)によると最澄は「延暦四年七月中旬」、すなわち比叡山入山直後より「奉為四恩」を目的に『法華経』『金光明最勝王経』『仁王（般若）経』の転読を連日行っていた（傍線①部分）という。この「奉為四恩」という表現は(B)の「奉誓國主、廻向率土」（傍線②部分）に対応しており、最澄亡き後の西塔を掌ることとなった円澄も同じ目的のもと『法華・仁王・金光明等経』の長講を継続した（傍線③部分）。延暦四年は新訳『仁王経』将来以前に当たするため、比叡山籠山時に最澄が用いていた『仁王経』は旧訳のほずである。

では、最澄が空海将来の新訳『仁王経』の存在を知ったのはいつ頃のことだろうか。

空海は書簡「忽恵帖」において、最澄が借覧を希望する『仁王経』が「備講師」によって持ち出されたままなので、返却され次第自ら最澄のもとへ届けることを約束し、その要求に即応できないことを最澄に対して詫びている。最澄が借覧した経論類の多くが空海初請求のものであることを考慮すれば、この『仁王経』も新訳を指すと考えるのが自然である。「忽恵帖」は成立の年紀を欠くものの、弘仁初期に最澄が空海からの密教教学伝受を積極的に検討していたこと、同四年（八一三）六月撰述の『長講仁王般若経会式』（『仁王会式』）に新訳『仁王経』およびその関連典籍である不空撰『仁王護国般若波羅蜜多経陀羅尼念誦儀軌』（以下『仁王儀軌』）からの影響が認められることから、最澄は弘仁四年までに新訳『仁王経』を空海より借り出し、披見を果たしていたようだ。図書寮年料経『仁王経』底本の旧訳から新訳への切り替えが天長年間（八二四以降）と考えられることを考慮すると、最澄の新訳『仁王経』受容はかなり早い段階で実現していたことになる。

二、弘仁九年・新訳『仁王経』転読の意義

——『仁王会式』との関連を巡って

『仁王会式』は弘仁三〜四年に相次いで成立した『長講金光明経会式』『長講法華経先分発願文』とともに、比叡山における護国經典長講会の恒例に位置づけられる。⁽³⁷⁾

『仁王会式』は参堂三礼頌を筆頭とする十四項目から構成されるが、うち新訳『仁王経』奉持品をふまえた「勸請頌」にて、未来世で正法建立・三宝護持を果たす諸国の王に対し、釈迦が五方菩薩の派遣を約束する場面について詳述した箇所が注目される。

至心勸請法界方 ^(a) 転法輪者法輪現 所修行願報得
身 ^(b) 行願円満住 ^(c) 等覚 現護国身 羅蜜多 持 ^(d) 金剛
輪 ^(e) 放三五光 毘盧舍那成正覚 請 ^(f) 転法輪 化 ^(g) 有
情 ^(h) 与四俱臆大菩薩 来 ⁽ⁱ⁾ 入日本 令 ^(j) 護 国 二種
七難皆除滅 紹 ^(k) 隆佛法 利 ^(l) 有情 ^(m) 最澄 『仁王会式』

右の一節は五方菩薩のうち、中方に坐する金剛波羅蜜多菩薩⁽³⁸⁾を日本へと勸請する内容だが、各傍線部分の解釈は左の『仁王儀軌』「明五菩薩現威徳」をふまえたものである。

第五、中方金剛波羅蜜多菩薩。(中略)解曰、言「金剛波羅蜜多」者、此云 ⁽ⁿ⁾ 到彼岸也。(中略)依 ^(o) 前法輪

現 ^(p) 勝妙身。行願円満、住 ^(q) 等覚位也。「手持金剛輪」者。毘盧遮那初成正覚、請 ^(r) 転法輪。以表示故。⁽⁴⁾「不空」^(s) 『仁王護国般若波羅蜜多経陀羅尼念誦儀軌』

『仁王会式』『仁王儀軌』いずれも難解な表現であるが、ともに金剛波羅蜜多菩薩を前世の「転法輪」すなわち説法の功德によって等覚位に安住する存在、菩薩の持する金剛輪を毘盧遮那如来による説法の象徴と見なしていることは確かだ。『仁王会式』には「一切皇霊等」を筆頭に歴代天皇や皇族・重臣のみならず、崇道天皇・伊予親王をはじめとする政治的敗残者、さらに東国征伐による武力的犠牲者と思われる「東夷毛人神霊」などから構成される「結恨横死古今霊」の名が列記されており、その整備の背景に深刻化しつつあった怨霊の跋扈が存在したことは間違いない。

『仁王儀軌』は新訳『仁王経』奉持品の各句を解釈し、さらに護国護家護身のために修する仁王経法の曼荼羅建立の儀則ならびに修法の次第を説く内容である。したがって、『仁王会式』に依拠する仁王会は新訳『仁王経』および不空撰述『仁王儀軌』と軌を一にする、密教的色彩の強い内容だったことが窺える。

『仁王経式』成立の前年にあたる弘仁三年六月末には雨期であるにも関わらず十日間の日照りに見舞われたことに對して畿内の明神を対象に、また翌月初めには疫病と日照

りが続くことに対して各地の明神を対象に、それぞれ奉幣が行われた。⁽⁴⁴⁾ 弘仁四年五月末には農繁期における不適切な労役動員が百姓の困窮を招いているとして諸国司を譴責する内容の詔が発せられており、天変地異や諸国人民の窮乏を『仁王会式』など護国三部経の講会制式の一要因と見なすこともできよう。このように考えた際、弘仁八年（八一七）六月から翌九年にかけて各地で頻発した旱魃・水害に伴い、最澄が嵯峨天皇および自身の有力な後援者であった藤原冬嗣の求めに応じ、護国三部経の講説を行った事実は注目される。

四月二十六日の未明、比叡山中の九院にて『金光明経』『仁王経』『法華経』の講説が始まった。一方、時を同じくして大僧都護命率いる四十名の僧侶が『仁王経』を講説していたものの、開講から三日経った段階では小雨が降ったほか、さしたる功德は現れなかった。四日目の夕刻、やはり最澄の後援者であった良岑安世が内裏に参上し、光定を通じて最澄より託された金字『仁王経』と表文とを嵯峨天皇に奏上する。すると、五日目の早朝に至って大雨が降り、「大賀」の場に居合わせた光定には修行満位が授けられた。⁽⁴⁵⁾ 以下に、金字『仁王経』に添えられた最澄からの奏上文を示す。

窃以、五濁之世、聖人難居、三災之時、人天俱痛。

是故、月光利見、請護国法、法王慈悲、開除難法。内張五忍之密納⁽⁴⁶⁾、外防七難之大賊。是以、天台末学最澄等、写般若於金字、献智劍於階下。誠願、安置深宮、朝夕孝礼。前導幸行、遊方為衛。即二十六日、率山寺一衆、分頭修於転経、細雲走峰、炎霞消散。細雨陰澍、白色復本。伏惟陛下、智慮真正、不徇邪道。慈忍起世、賞罰順道。聖徳動天、天沢即降。豈最澄、微物情誠感通。無任且慶抃躍之至。謹遣弟子一乘定、献上宝経以聞。沙門最澄、誠恐謹言。〔光定「伝述一心戒文」卷上〕

ここには、二十六日より比叡山内の大衆を九院に分置して転経を継続していること、本格的な降雨の子兆があったので、嵯峨天皇自ら供養を行えるよう金字『仁王経』を光定に持参させたことが記される。ここで注意したいのは、この一節が「最澄一門による護国三部経講説によつて三日目に大雨の兆が見え、四日目夕刻以降に行われた（であろう）嵯峨天皇による金字『仁王経』供養が決定打となつて五日目早朝の大雨が実現した」という趣旨の（物語）を示唆する点だ。恐らく、最澄らはこの祈雨儀礼において『仁王会式』に準ずる新訳『仁王経』講説と金泥書写の新訳『仁王経』奉呈とを行ったのであろう。一方、弘仁九年の段階では図書寮年料経『仁王経』底本がまだ旧訳だっ

たはずなので（既述）、僧綱メンバー中心と思しき護命らの『仁王経』講説には旧訳が用いられたと考えられる。また、金字『仁王経』を持参した光定に修行満位授与という報奨があったことに留意すれば、この〈物語〉からは「旧訳『仁王経』に対する新訳『仁王経』の優越」すなわち「南都の僧綱による護国祈禱に対する大乘菩薩僧の護国祈禱の優越」という評価が生まれることになる。

新訳『仁王経』と降雨儀礼との関わりにつき、『良賁疏』には良賁自身の興味深い述懐が認められる。永泰二年（七六六）の夏、長安は少雨に見舞われた。良賁は山河に向かって請雨の祈禱を行ったものの、その効験は一向に現れないう。自らの不徳を恥じるあまり、代宗に対面できなくなつてしまった良賁は新訳『仁王経』を前に沈黙考の末、ひたすら読誦に励んでいたところ、思いがけず降雨に恵まれた。効験自体は微少であったものの、この『仁王経』読誦が代宗の知るところとなり、良賁は内裏に召し出された。新訳『仁王経』の靈驗灼かなことと良賁の祈雨に対する仏の感応への喜びを表明する代宗を前に、良賁は「明主の至道、大臣の深信」そして十方菩薩の加護を改めて実感した^④という。

この奇瑞は永泰二年二月十一日から同年十一月八日へと至る『良賁疏』撰述期間のほぼ中間点に起こっており、良

賁の執筆意欲を大いにかき立てたことだろう。そして、このエピソードを含む『良賁疏』の「七難」解釈と新訳『仁王経』本文とが『顕戒論』にセツトで引用されることから、良賁の述懐は最澄に強い印象を与えたと考えられる。ここで想像を逞しくすれば、比叡山における祈雨儀礼で降雨の予兆を得た瞬間、最澄の脳裏をよぎった『良賁疏』所収の奇瑞記事が嵯峨天皇への金字『仁王経』奉呈をもたらした可能性もあるだろう。弘仁九年の比叡山における自身の新訳『仁王経』供養の成功体験を良賁の『仁王経』供養の成就譚へと重ね合わせることで、最澄は新訳『仁王経』に象徴される〈不空教学〉への信頼をより深め、大乘菩薩戒思想の妥当性を確信するに至った、と考えたい。

弘仁九年四月の『仁王経』供養の直後、同年五月から翌十年三月までに相次いで制作・奏上された『山家学生式』以降、大乘菩薩僧によって実践される護国仏教プログラムの中における『仁王経』の役割が明確化されるようになる。具体的には、五月奏上の「天台法華宗年分学生式一首」（六条式）規定の止観業専攻の年分度者による『仁王経』を含む諸々の護国經典の長講長転^⑤や、弘仁一〇年三月奏上の「天台法華宗年分度者回小向大式」（四条式）規定の大乘菩薩僧主導の『仁王経』供養による「未然の大災」冥滅の可能性示唆^⑥を経て、小稿冒頭で紹介した弘仁一一年二月

の『顕戒論』『血脈譜』奏上へと結実する。

このように、わずか二年足らずの間に天台菩薩僧育成のカリキュラムが、一気呵成の勢いで確立していく事実を振り返る際、その〈端緒〉に位置づけられる弘仁九年の『仁王経』講説が大乗菩薩戒建立実現に果たした役割を改めて見直す必要があるだろう。⁽³³⁾

三、新旧『仁王経』および『良賁疏』の位置づけ ——『顕戒論』をめぐる

弘仁九年の『仁王経』講説、『山家学生式』奏上（およびそれに伴う僧綱側からの批判）を経て撰述された『顕戒論』では、①開示大唐文殊為上座新制明扼十六、②開示仮名菩薩除災護国明扼三十三、③開示六蟲九猴不浄出家明扼四十九、④開示天竺不立記籍亦無僧統明扼五十二にそれぞれ新訳『仁王経』からの引用が認められる。ここで注意していただきたいのは、代宗撰の序文が引用された①以外の三箇所全において、新訳『仁王経』本文に加えて当該箇所に対する『良賁疏』の註釈が併記されている点である。この事実は、最澄が『良賁疏』を新訳『仁王経』解釈に必要不可欠のものとして見做していることを示唆するであろう。

良賁はもともと不空の門弟ではなく、『仁王経』再訳の際に將軍・魚朝恩の推挙によって一門の外部から招聘され

た協力者である。また、各々の後援者も安史の乱鎮圧という目標のみを共有する異域同舟の関係に過ぎなかったにも関わらず、二人の間には一貫して良好な関係が保たれた。

不空の手になる新訳『仁王経』『仁王儀軌』と『良賁疏』とは、不空（教団）と良賁との強固な協力体制を窺わせる密接な教学的連関を有している。⁽³⁴⁾ 最澄が『良賁疏』を重用した理由には、教学面における不空との密接な連関もさることながら、その内容が最澄の志向する一乘円教思想とも親和性を有していると判断された点を指摘できよう。⁽³⁵⁾ このような最澄の認識が明確に現れたのが、『顕戒論』巻中「開示仮名菩薩除災護国明扼三十三」の記述である。紙幅の都合により当該部分の引用は控えるが、この章段で最澄は新訳『仁王経』奉持品において般若波羅蜜多の受持・解説を通じて除滅可能とされる七難（日月難・星宿難・衆火難・時節難・大風数起難・天地亢陽難・四方賊来難）を総計二十九もの難へと細分化するとともに、それら諸難について適宜説明を加える。⁽³⁶⁾ これら七難↓二十九難への細分化および諸難の説明は『良賁疏』における註釈をほぼ全面的に踏襲する。先に紹介した良賁の『仁王経』読誦に関する逸話も、「七難」のうち「天地亢陽難」を細分化した直後に挿入されたものを『顕戒論』でそのまま引用しており、最澄は『良賁疏』の註釈を前提として新訳『仁王経』の内容を理解していた

ことがわかる。

一方、『顕戒論』巻下「開示天竺記帳亦無僧統明拋五十二」では新旧両訳の『仁王経』本文と『良賁疏』の該箇箇所とを併記するという構成がとられている点は注意される。本章段は『顕戒論』中における旧訳『仁王経』唯一の引用例であるが、最澄がこの章段にあえて旧訳『仁王経』を配した理由については、以下のように考え得るのではないだろうか。

謹案「新旧両本仁王護国般若経下巻」云、大王、未來世中、一切国王、太子・王子、四部弟子、横与二仏弟子書記制戒。如二白衣法、如二兵奴法。若我弟子、比丘・比丘尼、立レ籍為レ官所レ使、都非二我弟子。是兵奴法。立レ統官二撰レ僧籍、大小僧統、共相撰縛、如二獄囚法・兵奴之法、当二爾之時、仏法不レ久。已上、羅什三藏所訳旧本也

……(A)
大王、未來世中、一切国王・王子・大臣、与二我弟子、横立レ記籍、設レ官典主、大小僧統、非理役使、当知、爾時レ仏法不レ久。已上、不空三藏所訳新本也……(B)

謹案「即翻仁王経沙門良賁師奉詔所造仁王経疏下巻」云、西国出家者、不レ立二記籍、亦無二主司。僧中統撰、悉皆無矣。已上、疏文……(C)

誠願、法華一宗、天台両人、依二仏国法、不レ立二僧籍、

不レ預二統撰。安置叡山、令レ得二修学。……(D)

「顕戒論」下「開示天竺記帳亦無僧統明拋五十二」末尾の総括部分(D)より、この章段で最澄が新旧『仁王経』および『良賁疏』に基づいて主張しようとしていることは、天台法華宗に与えられた二名の年分度者を「仏国の法」に準拠するかたちで、僧綱を介さず比叡山内で得度させることの正当性である(傍線②部分)。その根拠となるのは、『仁王経』囑累品からの引用(A)(B)と『良賁疏』からの引用(C)、とくに「西国」では出家者の管理を目的とした僧籍の作成や俗官・僧官の制定・任命は一切行われていないという『良賁疏』の註釈(傍線①部分)であり、(C)の「西国」および(D)の「仏国」が共に天竺を意味することは章題からも明らかだ。しかし、新旧『仁王経』からの引用文からは未來世の王臣による僧尼の管理・使役を厳しく戒める趣旨こそ読み取り得るものの、その戒めが(D)に主張されるが如き(大乘菩薩戒壇設置の正当な論拠となる)仏国二天竺における得度制度の淵源に相当するのだという趣旨の文言は(A)(B)のどこにも見当たらない。この章段で『仁王経』の経文と「天竺二西国」における得度制度とを結びつけているのは紛れもなく(C)の『良賁疏』であり、新訳『仁王経』と『良賁疏』の両者はその密接な関連性を前提とするかたちで、最澄による大乘菩薩戒提唱の理論的根拠として機能している

ことがわかる。

一方、本章段冒頭に配された(A)旧訳『仁王経』を(B)新訳『仁王経』と比較すると、その内容面で多少の精粗が認められるものの、両者間の本質的な相違が意識されているようには見えない。私見では、最澄がこの章段であえて旧訳『仁王経』を添えたのは新訳『仁王経』との相違点を浮かび上がらせるためではなく、逆に新訳『仁王経』と旧訳『仁王経』とが同一内容を有するテキストであることを強調するためだったと考える。

このような仮説を立てる上で手掛かりとなるのが、空海撰述『仁王経開題』(以下『開題』)の存在だ。『開題』の成立時期は不明だが、足立俊弘氏は「何らかの法会において経の大意を示す目的で作成された可能性も考えられよう」という学術的評価を下している。ここで注目したいのは、空海が旧訳『仁王経』を底本として『開題』を著した事実である。

経有^二四訳^一。一、晋代三蔵竺法護訳、為^二一卷^一。二、後秦三蔵鳩摩羅什訳、為^二一卷^一。三、梁朝三蔵真諦訳、為^二二卷^一。四、巨唐三蔵不空訳、為^二一卷^一。然、晋本方言尚隔、梁本隱而不^レ行。唐本間以流布、秦本盛伝^二宇内^一。今所^レ講者、是其本也。〔空海『仁王経開題』〕

ここで、空海は新旧『仁王経』を含む四種類の異訳の存

在を紹介したのち、唐本^二新訳『仁王経』が一定程度流布している(傍線①部分)現状をふまえて、国内でより広範に普及している秦本^二旧訳『仁王経』をテキストとしている(傍線②部分)ことを宣言する。つまり、ここでのテキスト選定の基準は新旧両訳のいずれが広範に普及しているかという点に据えられており、新訳『仁王経』の請来者であった空海その人においてさえ、状況や用途に応じて新旧『仁王経』の使い分けを行っていたことがわかるのである。

天竺・唐両国の仏教制度を根拠として大乘菩薩戒壇独立を主張するにあたっては、論敵である僧綱側がその正統性を認めざるを得ない確実な論拠が必要不可欠となるはずだ。そのように考えると、未だ普及途上にある新訳『仁王経』と『良賁疏』のみを用いて自説の思想的正当性を主張するのは、最澄にとつて極めてリスクの高い行為といえる。そこで、『仁王経開題』撰述に際して空海が敢えて旧訳『仁王経』をテキストに選んだのと同じように、最澄は自説の論拠となる新訳『仁王経』および『良賁疏』の信頼性担保を旧訳『仁王経』本文の併用によって試みたのではないか。効験の有無という可視的な基準によってその経論の呪術的価値を判定することのできる法会・講経と異なり、所説の合理性を審議する場にあつては論拠となる文献の正統／正当性の有無が重視されたはずであり、一見す

ると迂遠とも思える論証の連続が必要となる場面もあつたことだろう。最澄（そして空海）は『仁王経』を活用するにあたり、〈天竺三如来の呪術的側面〉〈南都とのコンセンサスの側面〉の両者を意識しつつ新訳を前者へ、旧訳を後者へとそれぞれ振り分けることで、自宗における実修実践や自説の開陳・展開へと有効に活用していたものと考えられる。

おわりに

『顕戒論』には、『仁王経』供養に関わると考えられる以下のような記述が存在する。

謹案_二大唐大曆九年六月六日牒制_一、云、請_下於_二興善当院_一両道場_一、各置中持誦僧_上。

（慧朗はじめ七名の僧名列記。中略）

右件僧等、請_下於_二当院灌頂道場_一、常為_レ国念誦_上。

（慧幹はじめ十四名の僧名列記。中略）

右件僧等、請_下於_二大聖文殊閣下_一、常為_レ国転_中誦_中勅賜_一切経_上。_上 牒文

明知、念誦及転読、衛国之良将也。誠願、大日本国天台兩業授_二菩薩戒_一、以為_二国宝_一。大悲胎藏業、置_二灌頂道場_一、修_二練真言契_一。常為_レ国念誦、亦為_レ国護。摩

訶止観業、置_二四三昧院_一、修_二練止観行_一、常為_レ国念誦、亦為_レ国講_二般若_一。然則、一乘仏戒、歳歳不_レ絶、円宗学生、年年相統、菩薩百僧、不_レ闕_二山林_一。持戒八徳、祈_レ雨易_レ得也。₆₂ 『顕戒論・中・開示大唐護国念誦護国転読明樾三十五』

ここで最澄は、不空教団の一拠点・大興善寺に設置された灌頂道場である大聖文殊閣に「念誦」および「転読勅賜一切経」の担当僧をそれぞれ常置させることを請う牒文（『表制集』巻四「請於興善当院両道場各置持誦僧制一首」）をふまえ、比叡山内の灌頂道場・四三昧院に遮那業および止観業の大乗菩薩僧を常駐させることの正当性を主張する。₆₃ つまり、天台菩薩僧における比叡山内での護国經典転読が不空教団による大興善寺での護国經典読誦に準えられているのである。「菩薩の百僧」すなわち仁王会に必須の百座法要の条件が明記されていること（傍線①部分）や弘仁九年の『仁王経』転読の成果を連想させる表現「祈雨易得也」（傍線②部分）から、大乗菩薩戒構想が具体化した段階においてもなお、新訳『仁王経』に寄せる最澄の期待は高かったようだ。

最澄による『仁王経』供養はその若年期から晩年に至るまで、怨霊の祟りや過酷な災異を国土から除去するための実践的解答として機能し続けた。さらに、新訳『仁王経』

と『良賁疏』が不空教団と最澄門下とを理念的に直結する役割を果たしていたことも重要だ。

以上、小稿では(1)最澄による新訳『仁王經』受容は、若年期より晩年へと至るまで一貫した護国思想に沿ったかたちで、極めて自覚的に行われた。(2)最澄の新訳『仁王經』受容は『仁王儀軌』『良賁疏』の内容を前提としており、その成果は弘仁四年撰述の『仁王会式』において初めて具現化した。(3)『仁王会式』に準拠すると考えられる同九年の『仁王經』長講の成功は『山家学生式』『顕戒論』に結実する大乘菩薩僧育成構想の体系化を促進した。(4)最澄は『仁王經』に《天竺由来の呪術的側面》《南都とのコンセンサスの側面》という二側面を見出し、目的に応じて新旧両訳を併用した、という四点を確認した。

残された課題・さらに追究すべき点は多いが、後考を期してひとまず擱筆する。

注

- (1) 『大正新修大藏經』(以下『大正藏』) 五二、八六〇頁 B四一〇。
- (2) 『伝教大師全集』(以下『伝全』) 一、二四三頁。
- (3) 『定本弘法大師全集』(以下『弘全』) 一、二九頁。最

澄は大同四年(八〇九)八月二四日付の書簡で空海に『表制集』の借覧を依頼している(『伝教大師消息』『謹請法門事』『伝全』五、四五三頁)。

(4) 『弘全』五、一五〇一七頁。

(5) 阿部龍一「平安初期天皇の政權交代と灌頂儀礼」(サムエル・C・モース、根本誠一編『奈良・南都仏教の伝統と革新』勉誠出版、二〇一〇年所収)。

(6) 『顕戒論縁起』巻上「大日本国初建灌頂道場定受法弟子内侍宣一首」(『伝全』一、二八三―二八四頁)。

(7) 拙稿「毘盧遮那如来への(へみち)——空海の言語観をめぐって」(『日本思想史学』四五、二〇一三年)。

(8) 「天竺三藏、文殊為_二上座、大唐聖皇、勅答以為_二永式。」(『顕戒論』巻中「開示大乘文殊為上座新制明抛十六」(『伝全』一、一〇五頁))。

(9) 「乃有_二先帝(桓武・筆者補記)御願天台一宗。(中略)伏望、自_レ今以後、天台年分、每年季春三月十七日、差_二勅使一人。奉_二為登天尊靈。於_二比叡山院。依_二大乘_レ得_レ度。宗式如_レ別。(後略)」「比叡山天台法華院得業学生式」(『請菩薩出家表』(『伝全』一、一二二―一二三頁))。

(10) 『顕戒論縁起』巻上「大唐秦嶽靈巖寺順曉阿闍梨付法門一首」(『伝全』一、二七九―二八〇頁)。

(11) 木内堯央「伝教大師の胎金両部相承について」(初出一九六五年。木内堯大編『日本における天台宗の形成

木内堯央論文集1』宗教工藝社、二〇一二年所収。

(12) 『顕戒論縁起』巻上「大日本国初建灌頂道場定受法弟子内侍宣一首」(『伝全』一、二八三〜二八四頁)。

(13) 同前「賜向唐求法最澄澄法公驗一首」(『伝全』一、二八四〜二八六頁)。

(14) 順眺を不空の門下とする内侍宣・公驗の内容改変が最澄本人によるものか否かの厳密な判定は困難だが、『血脈譜』との整合性、最澄没直後の成立と目される「叡山大師伝」では当該部分が「方今最澄闍梨、涉_二溟波_一受_二無畏_一之貽訓」(『伝全』附録、二二頁)、「遇_二天竺無畏_一三藏第三弟子鎮国道場内供奉順眺和尚、入_二灌頂壇_一、受_二三部悉地法_一」(同前、二三〜二四頁。傍点はいずれも筆者)と記載されていることから、最澄自身の意図的な改変の可能性は否定できない。少なくとも『叡山大師伝』の記述から判断する限り、当時の比叡山では順眺を善無畏の門流と見なす立場が一般的だったと見ていだろう。

(15) 『顕戒論』上巻「開雲頭月篇第一」(『伝全』一、三五頁)。

(16) 『血脈譜』(『伝全』一、二三七頁)。

(17) 木内堯央、注(11)前掲論文。大久保良峻「最澄の教学——天台教学と密教」(同編「日本の名僧3 山家の大師最澄」吉川弘文館、二〇〇四年所収)。

(18) 武内孝善「空海と嵯峨天皇・藤原三守」(『空海伝の研

究——後半生の軌跡と思想』吉川弘文館、二〇一五年所収)。

(19) 木内堯央、注(11)前掲論文。同「伝教大師の密教相承と不空三藏」(初出一九六八年。注(11)前掲書所収、木内論文以下同)、同「伝教大師に及ぼした不空三藏の影響」(初出一九六九年)、同「顕戒論縁起」における一問題」(初出一九七二年)、同「伝教大師最澄と「唐制」」(初出一九七四年)、竹田暢典「日本天台における伝戒護国の思想」

(『大正大学研究紀要』五二、一九六七年)、同「平安仏教と不空表制集」(『大正大学研究紀要』五七、一九七二年)、同「日本天台宗と不空」(大正大学真言宗智山研究室編『那須政隆博士米寿記念 仏教思想論集』成田山新勝寺、一九八四年所収)。

(20) 良貴および『仁王護国般若波羅蜜多經疏』(『良貴疏』)については、山口史恭「良貴の生涯及び不空三藏との関係について」(『智山学報』五三、二〇〇四年)を参照。

(21) 『仁王経』はサンスクリット語・チベット語テキストの存在が確認されておらず、中国において無名の梵本や他本からの引用に加筆増広し撰述された偽経だと考えられる(水野莊平「『仁王般若経』の成立過程について」、『東海仏教』五三、二〇〇八年)。現在では旧訳『仁王経』を鳩摩羅什訳出とする見解はほぼ否定されており、新訳『仁王経』についても旧訳の一部を手直ししたものと見なされる

(頼富本宏「護国經典と言われるもの——『仁王経』をめ
ぐって」、「東洋學術研究」一四—三、一九七五年)。また、
新旧二訳のほかに晋・竺法護訳『仁王般若経』二巻と梁・
真諦訳『仁王般若経』一巻の「訳出」が伝えられる(智顛
説・灌頂記『仁王護国般若経疏』など)ものの、両者とも
当初から存在しなかったとする見解も根強い。

(22) 友永植「不空訳『仁王護国般若波羅蜜多経』小考」
〔別府大学紀要〕三五、一九九四年、藤善眞澄『隋唐時
代の仏教と社会——弾圧の狭間にて〕(白帝社、二〇〇四
年)、中田美絵「唐朝政治史上の『仁王経』翻訳と法会
——内廷勢力専権の過程と仏教」(史学雑誌)一一五—
三、二〇〇六年)。

(23) 『御请来目録』には「新訳経」として「仁王経二巻」
〔弘全〕一、一二頁、「論疏章等」として「仁王経疏一部
三巻 良貴法師撰」(同前、二七頁)の記載がある。

(24) 岩崎日出男「密教の伝播と浸透」(沖本克己編集委
員・菅野博史編集協力『新アジア仏教史07 中国Ⅱ 隋唐
興隆・発展する仏教』佼成出版社、二〇一〇年所収)。

(25) 「奉为国家請修法表」(『遍照発揮性霊集』巻第四、「弘
全」八、五三—五五頁)。この法会が実現したか否かは不
明だが、空海は同年東大寺别当に補任され、真言院の前身
となる南院を寺域内に建立する(『東大寺縁起』など)。

最澄が新訳『仁王経』の存在に着目するに至ったのは、

この奏上の作成・提出された弘仁元年前後という可能性が
考えられよう。

(26) 「是月、有司奉勅、造二百高座・一百納袈裟、設
仁王般若之会。」〔『日本書紀』巻二十六・齊明天皇六年五
月是月条〕。

(27) 田村圓澄『古代国家と仏教経典』(吉川弘文館、二〇
〇二年)。

(28) 西本昌弘氏は天長元年(八二四)に圖書寮年料経の
『仁王経』底本が旧訳から新訳へと変更されたこと、翌年
に空海作成の呪願文を用いた『仁王経』講説が全国的に実
施されたことの二点を重視し、空海請来の新訳『仁王経』
写本の巻数が一定数に達した段階で一代一度仁王会が創始
されたと推測する(西本昌弘「空海請来不空・般若新訳
経の書写と公認——一代一度仁王会の成立とも関係して」、
原田正俊編著『日本古代中世の仏教と東アジア』関西大学
出版部、二〇一四年所収)。

(29) 二宮啓任「朝鮮における仁王会の開設」(『朝鮮学
報』一四、一九五九年)。

(30) 蘭田香融「最澄とその思想」(安藤俊雄・蘭田香融校
注『最澄』日本思想大系4、岩波書店、一九七四年所収)、
佐伯有清『若き日の最澄とその時代』(吉川弘文館、一九
九四年)。

(31) 『伝全』一、一—三頁。

(32) 蘭田香融「承和三年の諸寺古縁起について」(魚澄先生古稀記念会編『魚澄先生古稀記念 国史学論叢』魚澄先生古稀記念会、一九五九年所収)。

(33) 『比叡山建立縁起』本文は、拙稿「比叡山造鐘譚に見る嵯峨上皇——伝円澄「比叡山建立縁起」を起点として」(小林真由美・北條勝貴・増尾伸一郎編『寺院縁起の古層——注釈と研究』法蔵館、二〇一五年所収)にて作成した校本に拠る。

(34) 『拾遺雜集』「忽患帖」(『弘全』八、二二六頁)。

(35) 三浦章夫氏は「忽患帖」の成立を弘仁三年(八二一)のこととする(『増補弘法大師伝記集覧』密教文化研究所、一九七〇年)ものの、その具体的な根拠は不明である。

(36) 注(28)参照。

(37) 『望月仏教大辞典』「長講会」の項。

(38) ここに登場する「五方菩薩(金剛手菩薩・金剛宝菩薩・金剛利菩薩・金剛夜叉菩薩・金剛波羅蜜多菩薩)」とは、旧訳『仁王経』受持品における「五大力菩薩(金剛吼菩薩・龍王吼菩薩・無畏十力吼菩薩・雷電吼菩薩・無量力吼菩薩)を、『金剛頂経』系の密教経典にみえる密教諸尊へと置き換えたものである(藤善眞澄「密教と護国思想」初出一九九九年。『中国仏教史研究——隋唐仏教への視角』法蔵館、二〇一三年所収)。

(39) 『伝全』四、三〇〇～三〇一頁。

(40) 「大王、若未来世有諸国王、建立正法護三宝者、我令五方菩薩摩訶薩衆一往護其国。(中略)中方、金剛波羅蜜多菩薩摩訶薩。手持金剛輪、放五色光。与四俱胝菩薩一往護其国。是五菩薩摩訶薩、各与一如是无量大衆、於汝国中作大利益。当下立形像而供養之。」(傍線は筆者補記)「新訳『仁王経』(『大正蔵』八、八四三頁B二四～C九)」

(41) 『大正蔵』一九・五一四頁C一八～五一五頁A二。

(42) 「結願頌」(『伝全』四、三〇七～三〇八頁)。

(43) 『仏書解説大辞典』「仁王護国般若波羅蜜多経陀羅尼念誦儀軌」の項(神林隆浄執筆)。

(44) 『日本後紀』卷第二十二、弘仁三年六月壬子条。同、弘仁三年七月丁巳条。

(45) 『類聚国史』卷百七十三、災異七、疾疫、弘仁四年五月丙子条。詔勅文では「非縁災祲、常告民飢一仍年々賑給、倉廩殆罄」と、災異が起こつていないのに賑給が行われた結果諸国の倉庫が空になったという点が強調されている。しかし、前年夏の旱害・疾病流行が(少なくとも間接的に)諸国の貯蓄量に影響を及ぼしていたのが実情ではないだろうか。

(46) 光定『伝述一心戒文』卷上「被最初年分試及第得度聞伝宗旨文」(『伝全』一、五三三～五三六頁)。

(47) 同前(『伝全』一、五三七～五三八頁)。

(48) 『良賁疏』卷下三(『大正藏』一九、五一四頁A八〜一六)。

(49) 『顯戒論』卷中・開示假名菩薩除災護國明摠三十三(『伝全』一、一二五〜一二九頁)。

(50) 弘仁四年原撰・同七年完成とされる(田村晃祐編『最澄辞典』東京堂出版、一九七九年)『大唐新羅諸宗義匠依憑天台義集(『依憑天台集』)』には、「大唐青龍寺翻經講論新法相宗沙門良賁(『伝全』三、三四五頁)撰述(『新仁王經疏下卷』(同、三四九頁)からの引用が認められる(注(55)参照)。従って、最澄は弘仁初期に空海より、新訳『仁王經』と同時にしくは相前後して『良賁疏』を借覽・書写したものと考えられよう。

(51) 「凡止觀業者、年年毎日、長_三転長_三講法華、金光、仁王、守護、諸大乘等、護國衆經。」「天台法華宗年分学生式一首」「六条式」(『伝全』一、一二頁)。

(52) 「窃以、菩薩国宝載_三法華經、大乘利他摩訶衍説。弥天七難、非_二大乘經、何以為_レ除。未然大災、非_二菩薩僧、豈得_二冥滅。利他之徳、大悲之力、諸仏所_レ称、人天歆喜。仁王經百僧、必假_二般若力、請雨經八徳、亦屈_二大乘戒。」「国宝国利、非_二菩薩_一誰。」「天台法華宗年分度者回小向大式」(『四条式』(『伝全』一、一九頁)。

(53) 佐伯有清氏は、『仁王經』をはじめとする祈雨儀礼が執り行われた弘仁九年五月以降も早魃や大地震、暴風雨な

ど全国規模の災異が頻発したことから、「最澄らの祈雨修法の感応は、いっこうに顕れなかった」と評価する(『空海と最澄——交友の軌跡』吉川弘文館、一九九八年)。「四条式」中の「未然大災、非_二菩薩僧、豈得_二冥滅。」に対する僧綱の「若真菩薩、可_レ如_レ所_レ言。其假名類、不_レ合_二此言。所_レ以_レ然_一者、当_レ於_レ今時、不_レ滅_二未_レ然_一之水旱、不_レ救_二已_レ興_一之飢苦。」所住国邑、災禍繁多。所住聚落、死亡不_レ少。是以得_レ知、非_二真菩薩。」(『顯戒論』卷中「開示假名菩薩除災護國明摠三十三」(『伝全』一、一二五頁)(傍線筆者)という批判は、恐らく最澄らの祈雨儀礼完了後にもたらされた成果が小規模かつ限定的であった事実をふまえており、佐伯説と同じ視点に立つ主張であるう。一方、小稿の評価は(たとえ小規模で限定的成果であれ)《不空_三教学》に依拠する『仁王經』転読段階で降雨がもたらされたことを重視する最澄(門下)の視点に即したものであり、佐伯説や僧綱批判とは次元を異にする。最澄自身、右のような僧綱の批判に対して「現起の難」「已定の禍」を除滅できない事実を認めつつ、新訳『仁王經』(および『良賁疏』)に基づく仁王会を行うことで「遠因の功德」「未定の災」を除去できると述べており(同前。『伝全』一、一二五〜一三〇頁)、継続して新訳『仁王經』の功德を期待していた。

(54) 山口史恭、注(20)前掲論文。

- (55) 『依憑天台集』では、新釈『仁王経』奉持品を流通分・正宗分の何れに解釈するかという問題に対し、正宗分と解釈する「天台等義」を支持する『良賁疏』の一節(『大正蔵』三三三、四九四頁C八〜一三)を引用し、『良賁疏』が天台教学から影響を受けていることの証左とする(『伝全』三、三四九頁)。また、弘仁一年頃の成立とされる『決権実論』「問不定性者捨身第十」では不定性の二乗、すなわち声聞・縁覚が分断身のまま無余涅槃の境遇に至ることができるとする徳一の認識を否定し、「道生、吉蔵、靈潤、法宝、慧苑、定賓、澄観、法相宗義寂、義一、良賁等、新羅国元暁法師、我日本国上宮聖徳王、約二一乗実教、都不_レ許_二延身_一。(中略) 況復、天竺来_レ唐、曇牟讖三蔵、流支三蔵、真諦三蔵、実叉難陀三蔵、日照三蔵、流支三蔵、金剛智三蔵、無畏三蔵、不空三蔵、般若三蔵等、立_二悉有_レ仏性_一、盛伝_二一乗教_一。(後略)」(『伝全』二、七〇〇頁。傍点は筆者補記)と、一乗(実)教の宣布者として良賁・不空両名の名を明記する。
- (56) 『伝全』一、一一五〜九頁。典拠となる新訳『仁王経』該当箇所は『大正蔵』八、八四三頁A六〜B四(但し、途中に省略部分あり)。
- (57) 『大正蔵』三三三、五一三頁C五〜五一四頁A二七(但し、途中に省略部分あり)。
- (58) 『伝全』一、一七九〜一八〇頁。

(59) 足立俊弘『仁王経開題』の背景思想(『智山学报』五三、二〇〇四年)。

(60) 『弘全』四、一四八〜一四九頁。

(61) 注(21)参照。

(62) 『顕戒論』中「開示大唐護国念誦護国転経明扼三十五」(『伝全』一、一三〇〜一三一頁)。

(63) 「開示大唐山金閣等五寺常転大乘明扼三十四」では、大興善寺と並ぶ不空教団の拠点である五台山内の金閣・玉華・清涼・華嚴・呉摩子の諸寺における『仁王経』『密厳経』転読の勅許を求める奏上(『表制集』巻二「請台山五寺度人抽僧制一首」、『伝全』一、一三〇頁)が認められ、直後の条文と同じ趣旨に基づく引用であると理解できる。

* 小稿は、平成二十七〜三十年度科学研究費補助金(基盤研究C・課題番号一五K〇二〇六九)の成果の一部である。

(東北福祉大学専任講師)